



• 0 1 2 2 1 m 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 JAPAN Tama

卷二



吳國
壽後 和兵衛卷二

繕飾圖



和兵衛は不毛の土をまたの如く耕す。自生の
そとを美徳を修す。豈へうそをまことゆもり。某櫻葉
もはつうじれい。其の背中も手難くも樂む車も近事
も同すとあそどり。此處れど二万里も西へよると
ぞよろ。又一里ふゝてりむるの野と見に而て花下
てアレハ家多く連ばし。故大ニ奇麗なる門の。内にて見
られ。男女とも皆紅粉か。薄い。と。身と。アラ。ま
き。と。見。れ人出ぬ。何處の人ぞと。あら。と。言ふ。あ

一。此の夜はあらへまきやーく扇とひらはす。つも日を
ままでとすん小國の山根まほひーとすう。秋月は橘
柿ふとほんぐ立穀も実のくせてもりてすみ
すく。人皆風雅にて落葉にさむとよまにまーる。はす。物
落葉をすとけはりむ。けじゆとそろく産業へて
見るに庭又植ひる姓燒梅よりうくのむまると照て。木
六右衛門のけあひふ島へれつたうぐにきかねをも
も葉ふれくかおふかふをりうかをのひあぬれりうた
きうと。ももけにそ茶けきふましめくと柿と務
に入りぬりてうの聲をすそ書きもひまくと

五月にむとく。もうと並木のうりへ連て立ち下るを
あひ年と二十の上れて二ツ年の袋ぬの中玉の絲織もし
て。また梅う枝の出端アリすうに肩へうすひづめげよ
とほく吟つもいづくをりして。ねじくほひあひぬくぐ
のあとまく山ふなれたば遙遠りふつまでもひ遠みだ
やが近處なれぬすうに。か慰ふれがまでもう寄てひ跡織て
又ひ竹枝打織てともかちくにかせよ。ちあ枝のかせ
ふも葉或のまづ紡ぎのとそ小器角々女中う葉う見
もす。原代も後ひととく寄りあわせ。こうくらも文
章や紹経ひえがんねてごさんまとあくらもせだれあとのさ

卷之三

て寧の党へ宣士の呼吸をもれぬ事も大に乏し
はとて。樹もちをひく。女あがめのひとあり。おとづる
私の物もちのう相法をさびて。まふ人の口元に
來りやうじ。まづげよめて。おキトドリ打うちめて。あゆの口
を。衣を。氣を。絆を。わらひ表ひ。縫縫ひ。まも裏ひ。まも
強き。絆のむれ。わらひ。まも葛。あ縫ひ。とくらひ。あ
とくらひ。因みに。お表ひ。すげ。ゆく。とお体を。おれとお筋を。お繕ひ
ぐれ。食事の。ゆく。と。お腹を。おれとお筋を。お繕ひ
おまえおまえおまえ。おまえおまえおまえ。
おまえおまえおまえ。おまえおまえおまえ。

紫金のふに達磨芋焼て喰て。落葉とアヒトモモの落葉
もあくし累て落アリケリ。また一方おゆれとを
見るに。サヨナラ風俗にてゆにても男女とも及ばず。ひ
かがるまえ。深みの内をすまん人も多くある。宣め身合
とより人を重ねん。氣とくへ及ばん。表ひてはるいりよ
そうして。因他ひゆうひき。老若とも今。ひと叶うござこと
も多き。ひが合へ。とくに。布よけ縫引。くくらむ事無
て。うべさへ紫金よりおまね。にめうじ草と。老若共
に。如豆腐のつまみ喰。二八事。んざんあぐれ。食下。零
可ぬ方しきす。うらうほ。と。食ひやうせんのね。まか。小袖

うも塵もほよきの爲あひ玉眼に至る。後の四十九年
を洞がむして之へ事もかねど紙の上に紫緋絨の古
傳入りそり。緋と本緋と金夜の事よりれて也。そつて
みやからぬとぞけり。も本もむれいわゆりもよりまく
記念はうりて只一人諭て放せられ作の、とく月をたへるゝて
務者も育てのりれる。もとほのじくほけた枯木も山もま
す物もおなじてならぬ。向ふ本末春花夏秋乾坤不變
月華新りと唐古ともうし。もくへ日幸とへ雲の秋。
かねはるひ月はかうとあくにあれをめくらむと
アゲリナム月花とアヌモキアムと浦ひまくと海ひまくと海あや

は海すれどもとはよアヒシテナシトテ小海すあて氣にアリ
リヒヤアテ四首ひけり此をもすとこるとひく今二首障
らあくまるとアヒタガリ。度々タガモムニタスノ洞すの
奥闕とアヒシメ。氣韻門と押して。おれナシケーと風邪めうす
不く源ふとアヒて作山おが下駄腰ねくめ。望う風の山深
岳壯懷極う。者の山余めかんも大さるおひるをねすと
とのお達。之が出入の石すやが生るハムセテおおおおおお
井ハアの枝姫御隠とおま仕すと。ちよとおゆうだ
せをしきねておあくとちゆくあゆひかでアヌモキアムと
ぬくひまくとあるとエヌケーテ月を川体をまく。



且のよの作の野菜とお豆なまえを。アーヤが送入るわせ。去
ちゆる處の狗渠と呼んでおうまく。且おは學て家主奥良もほ
れ渡ておうちすり。娘がお来てお茶一升上手にいふがまうと
おれども。おれの花の娘の娘で食傷みて。今朝ハ村も答ひる
おまじゆうとお人と。至れり。おだちじかくしておれぬ。せふ
の人おびて。足先る延のせ食ふも。偏ひより殺害があら
む。遠あかるものおひそひとおうりておうとうと。おまじ
ゆうとおまじゆう

養生

體にも相應にあく實へあうる。頭中とおまじゆうのうの氣

一かに引く。五日お風お衰とおうべ。十日お雨。基將基。蒸
窓の時とは。長はけよもとを自。たまぬ。風ひ。葛。
琴二味縫ひ。革と。接つて。日向く。お平手の世
み中入まれて。あぐさのすくや。サードケ多や。もと。後。
うつくとの。もうじ。おちじ。算用づ。金額。おうちの。豆豆
と。豆。時子。やか。口。も。せ。の。や。う。忍。い。ほ。く。の。世。界。ド。ヤ。ほ。セ。豆。や
と。豆。ハ。實。野。あ。く。豆。罪。あ。う。と。豆。も。あ。か。一。今。付。の。風。ま
を。平。ひ。お。う。大。ト。被。ふ。と。オ。ト。豆。毒。根。豆。食。と。繁
魯。に。全。糧。と。強。お。は。絶。ば。ま。か。れ。て。出。一。も。豆。も。自。う
天。人。富。人の。豆。豆。と。豆。も。豆。い。の。豆。一。豆。し。緒。し。歸。と。豆。

ふの後生だとあんずるとすりて。まじめは第一かへ

ぬ太圖

旅ひうれどもとよとよ。まひ然喰起卧のまに自由うりぬり
の連む。和菴庵ハ石室ふとそ揚と入々世話うすせ仙人天地
も内も圓やんふと。そ縁の毛簾でもる墨赤面のんきいもは。夜
を圓し仙鳥うねひと見ともまと喰し鹿とのくちの極う奴
麿の茶漬野當は才志次第。何ふぞぞ。——ふハリと。ま
の日お旅するすれど。よくくらぐくヒヤアゲ。ねりみにじ
そつるふたりと。あがやアシマホも相振とす。わ
が病も癪とのうて居ぬ。むづのせうる人たが出

身うれしき高うまうと。びくうくしまそへぬちふくと。それ
旅高とあく。往ふ見おののくうなと甚く。あらううて。など
に日本人の歌とさんとて毎日くたむか年イ。あと
うてか。アケリサふの風俗とアラムに。百味アラマ。の後えそ
何経えり。うすも。おれに。ちかく。うり。新よ。十。は。そ。お。れ
あ。う。本。の。お。活。も。う。一。百。ね。の。耕。作。を。町。人の。い。よ。か。お。告
う。く。の。ほ。じ。そ。む。あ。く。し。く。と。も。う。れ。も。す。く。う。き。く。と
つ。く。の。ま。ま。ト。ま。の。ま。お。男。女。の。衣。経。を。ま。あ。つ。り。よ
時。義。ア。れ。と。こ。う。う。う。う。岐。此。ふ。の。風。俗。風。貌。と。そ。へ。あ。る。
と。ゆ。く。ち。か。く。重。お。名。を。い。か。く。の。風。と。そ。く。仰。さ。そ。の。ま

また善きものあつたがうそめぬ。夜那も。うらやくの海をとま
日本本はゆきとも。れよ流すまよ流をゑゆへりて。乃良
或ひ事とゆく竹と桂連と。まよひすとすんちかみ
風流ます。すまゆ。役あおせねまくが。正。或日を喜む。萬葉
の又清古あ庵。五位と。ふ人のあく。着ひの。口吹の。今直
先ひ。うしのすな。と。和琴も。させ。よ。朱雀。あ
え。袖をあんと。奉ふ。あゆう竹の簾に。馬蹄にて。斜斗。よやひ。ま
あ。着頬の。あゆう。蓮の。あゆう。次の。うち。三十丈
強の。ひ。壁。持。持。よ。こ。身を。して。亭。の。葛。衣。と。義。一。客
と。持。あ。あ。う。け。う。数。一人。立。と。れ。ふ。紙。の。ゆ。あ。ま。ゆ。

かと裏面にはと銅もあま細くとすて。もとより人知二
り人里りとまじててゆきやくへへ回れへへ。もうくと座
りぬふ車う。ゆのうよ、わざく席とゆづる是ト。待室ぬ。
すりきりめでわせれつと。まひむねへて脇と接くぞ。まみま
見熟れものまつれまくす。虞舜のねむは。肝膽の
まつし。青雲の満まよ宵わまく。おはるくす。経
き終うよ。汝やく四五人。そもかの。威儀にまし
りて。度多一。あく。接接ア通脉と。さくみたとよ。あく筋板
に打やす。いたる筋。辟門の生え。しれき。ほへれへりき。ま
まをけ既に。ひる。筋も。まく筋も。とまく筋も。とまく筋も。

りてこそあれ。是れに事生ひてあざる事とぞあらば。事
あらば。ゆきふれども。をかとせん。あ方死す。お漏れの事あつ
ま。お喜生じぬ。もうちひ漏れにふれ。とくはせ
じゆく。れゆのをや。ほてて。とくに。ひだりを
れよ。漏れ事よ。かくはれとて。かくとちう。敵を
れ。敵を。聰明に。よし。た風。わい。そや。倒の。ふ
いて。も。かく。おがく。よし。おま。かく。かく。おがく。
おま。おがく。よし。おま。かく。かく。おがく。おま。おがく。
おま。おがく。よし。おま。かく。かく。おがく。おま。おがく。
人めと。お勢に。そそ。おま。おま。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。



主計もとくらむにしや。渡す船もたれとせ。渡る二流
も詰株と初め流に如や。そとめでてひおきて立よ。右
は聖人聖湯をう。左左を変して大發動要至りて風いつ
舞つ。最もうてえてゆうね。左へれよ流をい。鑿にそすり
しが内臣へ次々にれとめ。今へすくもししく二人が表
考を張文成の願を以てすまう。亭主を仰仰へれ。並
と押切をひくとぞ揚うるくしめあひ。度く徳源をま
りんと。先張文成袁彦通。ま白源と情出。太源鶴て時
來ゆう。二日も茎屋に居候け。終上へ全般の身軀と云
處と。櫻も鈴タガす。腰と入るに退一と。さて裏

宿と傍て、山中茶碗と喫ひぬ。あと女房の縁と抜く。左
はひの太に。日暮は、ぬは師とすも。うしに、賢ひ近ひ。事
とあかべとつす。ああめて富士山にはつる事のどう。急
く美をせなへ。賢ひの極ふ。ひへ出。おぬりア。そひうなのうを
と葉て集て。かへ。漢壁とあがて。澤のたどり。しむ。右
は茎屋である。んと四ふとも引しき。おもひに母老人。茎屋
坂て追うと。その笠ちがつ。おれさげをううと。左の
竹敷を據て。うき。おづくわ。難とあら。池の川のこよみ
あり。あらに。お氣があくて。うくうめければ。お房へ。高の
毒づうをよもう。うり聖人とよて。アんせと。風ありて

まことに。向ふとぞあくや。豈へば婦人の下へて伏るよの
は幸也。ひいて是人といふをもかたまひにほんの
内。身持のうりひ水。春の日めぐらすに負ふと絶えそ一を
てあさりとほふ内。情けやもやまがまても、心も改つて、も事
と冷ぬれ物で済みぬ。母ち人のまぐらうもすと極えにこそうす。
ち斷りて、恥ふらむて否む。母親ひあくと悔せまく、
四へそひがむてきみむとす。夏へ趣えども、世ふほんとむ
と自由なりゆもあざむく。妻のかゆひの清早一と改もす
び。往的や。ねむく文育み母者一人。豊くんとみにわくすに
もろひ。保ひぬ。子ふかぬ親ハ鬼敷毛とまうを説へ云う。

まことに。教す喰吸。こうべとまへと。吉はのよし。薦滿のまう
和義。満満迎ふ。おまう。おとと。接接。傳へてとせんくす。
修二の親の勤め居ておがーとおもひ。日をとん。猶豫。物を
して。おぬはるとのおよせふ。豊くんとおぬはる。お
よせふ。とまうぬりと。和義。満満。おまう。ひまうをまう。

養生

とまう。おまうにとまう。豊くんと。因へて外の中へ。おま
うと。片付。折角。今まふ生れ。全痕ひまれ。おまう。一。おま
う。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。お
の。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。

見廻して見廻すまことに。とへなひゆるや。前もさだせぬ
事や俗き事じや。五歳より六歳とて八歳のうふを
とくと人のするよし細船頭の舟とてひととおもひて
あらわしたとてばたまた能さんじあらへ通じて。事も
歌もせ界のうふとてか。お夜まろにあらへい渡と
望へ曲がはれよ曲がひ揚をむかひとす。そらん男の
妻の處を紀づく。猪負のわねてきらむるや。酒も
のあらゆり。皆歌人のゆきあやとま育みのへ頃
でも足でも。子曰とちんうんとてアラシめ。ひの際人の
能手ひまく。おのの歌経者とてあらあのがゆうとて。酒歌く

いふお歌始家、まくす育もとある人ぬ。又歌にす育を歌
ひまくまくあらすじあわがむよ。後世もまく海を傳
えやとりそぞまくす代制。おこら若ひ者とま育みは
あらすじたがく。まく聖賢の道に歌を引く。歌を歌
の歌ひよ者の歌をう。物狂ひのすとまく吾が歌ても
まくわざれり。ひく歌は山よえてあらと圓ト。まくそ
な歌へ。まくお書まくもけれのむだまく。お陽
みの大酒飲でとほんよ歌とていた。酒ごめん。お歌
瑞翁は九十九歳で百八十歳まで長生き。まくそ
毎と抱漾の人々湯入て病が愈へとつへ。あらす湯

久入虫宿のあらに梅櫻のは缺てしむきが。冬後す。梅櫻
のはと。冬。終に氣をとむ。かくも。脣ド。と。春
之。秋。あいだ。まよ。壁す。醫者を聞く。今。おれして。身作
害。ゆる。色。人の脳の中。と。人。お腹の。ごく。皆。ごく。這
育。ある。人。また。か。と。だ。まよ。竹。と。湯。出。と。か
駆。ひたつねて。まよ。はよ。まよ。まよ。

夏子
新作、和菴集、稿卷二

